

丈人力のスヌメ ～未踏の「人生九〇年」を踏破する～

筆名 堀 亜起良 東洋哲学者

元『知恵蔵』編集長 堀内正範 著

目次

その一 「引退余生」でいいか 「現役長生」がいいか

- 一 「人生六五年」から「人生九〇年」へ 3
- 二 「丈人力」を活かす成熟・円熟期 11
- 三 長寿を愛しむ三つの流儀 19

その二 「マイホームパパとママ」の憂鬱

- 一 「しあわせ家族」は外にある 31
- 二 マドギワに居場所をすえる 39
- 三 宙に浮いたままの「暮らしの知恵」 47

その三 生活感性を満たす国産・地産品

- 一 「MADE IN JAPAN」はどこへ行った 56
- 二 途上国産の日用品に囲まれて 67
- 三 アベノミクス+エイジノミクス 75

その四 「地域の四季」を探し求めて和風回帰

一	和風回帰のキイは「季節感」の共有	88
二	春秋のまわり舞台で衣食住を演出	99
三	中心街は「三代四季の情報源」	117
その五	高齢期二五年の居場所づくり	
一	「エイジング・イン・プレイス」での日々	127
二	高齢社会活動の先行的事例	139
三	「新・地域ブランド品」で全国制覇へ	150
四	わがまちの「生活支援コーディネーター」	158
五	仲間+たまり場+まちづくり	167
その六	「人生の達人」としての八面玲瓏	
一	まあ、いいか、でいいのか	176
二	ひとりの住民・市民として	190
三	ひとりの国民として	199
四	ちよつとばかり国際人	210
五	不戦不争の灯かりを伝えて	219
おわりに		
そして「寿終正寝」(天寿)を全うする		222

その六 「人生の達人」としての八面玲瓏

— まあ、いいか、でいいのか

パソコンで「八面玲瓏」と書こうとしたら

*「れいろう」でなんと「冷老」と出た

深夜に、愛用のパソコンを前にして、「八面玲瓏」と書こうとした。

無理かなとは思いつながら「れいろう」と打ったら、なんと「冷老」と出た。

眠気覚ましにはいささかサービス過剰な応答である。

パソコンの辞書からは学ぶところも多少はあるが、気ままな応答には多々苦笑させられる。

「玲瓏」くらい一発で出なくては辞書として失格であるし、「冷老」では失礼である。

「玉などの透き通りあきらかなさま」とペーパーの辞書にはある。「だれに対しても曇りなく応対できて、処世が円滑である境地を示す」といったところが、わたしのほしい解説である。

「玲瓏」を好んで揮毫する人に棋士の羽生（善治。永世名人）さんがいる。盤上の争いとはいえ、真剣勝負を前にしての心境が示せる、含みの大きいことばなのである。

夜も三更（これも一発では出ない。夜五更のうちのまんなか、午前さまのころ）にいたって、

思い立って日録に「八面玲瓏」と書こうとしたわけは、

ひとりの「人間」として、

ひとりの「親」として、

ひとりの「働き手」として、

ひとりの「住民」として、

ひとりの「市民」として、

ひとりの「国民」として、

ひとりの「国際人」として、

そして、ひとりの「現代人」として、

八面から自省して、だれに対しても曇りなく応対したいと願ったからである。

そんな心境になるのは、棋士なら「名人戦」などに向かうときだろう。

名人と達人はどう違うのだろうか。

「名人」は、技芸にすぐれて名のある人。

「達人」は、広く物事の道理に通じた人。人生を達観した人。

と、先のペーパー辞書（広辞苑）にはある。とすると、「名人」にはだれもがなれないが、「達人」にはだれもがなれる。前記の解説ではバーが高いが、本来はだれもが跳べるところに「人生の達人」はある。

「達」については孔子から習うことにしよう。（『論語「顔淵一二」から」

「達」というのはどういう姿をいうのですか、という弟子の子張の問いに孔子はこう答える。

なにより質朴で正直なこと（質直）、だれのどんな人生も有意義であると思うこと（好義）、ことばをよくわきまえて（察言）、表情やふるまいをよく見定めて（観色）、配慮して人の下に
つくこと（慮以下人）です、といっている。

とすると、そういう生き方ができた人も、これからしようとする人も、途上の人もそろって
「達人」である。だからここでは、人生目標は未達成でも、それを生涯にわたってめざしな
ら、だれとも等しく親しく接する人生を送ろうとしている人を「人生の達人」と呼ぶことが
きそうだ。これなら特定の人だけではなく、だれもが「人生の達人」になれる。

まとめると、「人生の達人」とは、生涯にわたって質直に人生目標の達成をめざしつつける人、
の意でいいのではないか。

わたしの場合は、曇りなくみんなとともにという思いを「八面玲瓏」のガラス張りにしよう
と試みたものである。

棋道の達人でもある羽生永世名人なら、盤の向こうに対面するのは、いずれ劣らぬ好敵手
あろうが、願って「人生の達人」をめざそうといういま、盤の向こうにいるのは、他でもない
もうひとりのわたしである。

もちろん先手はこちらにある。

「おまえが達人に？ 丈人までは納得できたが・・・」

そう口撃の先手を打たれて、初手から「挙棋不定」となる。コマを手にとって挙げたもの、さて、打つ心が定まらない。打たなければ先へ進まない。

「まあ、いいか」

そこで定石中の定石である二六歩にそのままコマを置く。

将棋盤をはさんで、「達人」談義を交わし、地域や職域や趣味やでの活動にどう参加したらいいかの策を練り、一步をすすめる自分がいる。

「人生九〇年」のステージを迎えたのに

*意識はまだ未熟か半熟のまま

国民の一人ひとりに対して、これまでの「人生六五年」の意識を「人生九〇年」に改めて、身の周りの姿（社会）を変えながらすごしてほしいという懇請に近い要請を出したのは、先にも記したように、内閣府である。

ひとりの「国民」として、質直にどう対応すべきかと考えているうちに、前記の八面の心境に達したのである。

新世紀になってもこの一〇年余り、国からそんな苦渋に満ちた指摘や要請が高齢者に向かっ

て出されたことはなかった。まだ国庫に余裕があったころに決めた「社会の功労者」としての高齢者温存のしくみがどこまでつづくのかに不安は感じながらも、団塊の世代さえ、六五歳から支給される「年金」を頼りに余生を生きることができると考えて、さしたる切迫感を感じなかったのである。

それがこのたびの要請は、「人生九〇年」への「高齢者意識」の変革と、その間への就業、健康づくり、社会参加、学習活動、生活環境、市場の活性化、全世代の参画といった各分野への積極的な「社会参加」である。

国のしくみの変革への全面参加の要請であることを、ことばをよくわきまえて（察言）、国民のひとりとして正確に認知する必要がある。

「高齢者意識」については、多くの国民は、定年が延びて年金が支給される「六五歳から」と意識することはあっても、「人生九〇年」までを考えることはなかった。この「人生六五年」から「人生九〇年」という二五年の唐突な延伸こそ政治不在の証である。後に詳しく述べるが、一九九九年以降の政治リーダーにはこぞって責任がある。だから国家の要請に質直に耐えうる「高齢者意識」は、未熟でありせいぜいが半熟のままなのである。

これまで「現役長生」型の暮らし方をしてきた人なら、「やっと来たか」

と、そのまま受け入れられるだろうが、「人生六五年」での「引退余生」を意識して、けっ

こう長かった現役時代のトップギアからミドルあるいはロウにまでギア・チェンジして。しまった人びとにとっては、「いまさら何を」の思いがあるだろう。

とはいえ、だれもが納得せざるをえないのは、高齢者（六五歳以上）が三三〇〇万人、二六％にまで達してなお増えつつける社会では、一人ひとりの高齢者の二〇年を越える「余生」に、介護と医療を提供しつづけ、穏やかに終末までを看取るという「社会保障」ができなくなるということ。周辺を見、総体を考えれば、だれもが納得せざるをえない将来の情景である。

ここで「自分だけはなんとか」と考える人が出る。

そのときあなたは、そこから格差を認める思考過程に入ることになり、「温かな助け合い」の輪から抜け落ちることになるのに気づいているかどうか。

かつて大正七年に芥川龍之介が『赤い鳥』創刊号に書いた「蜘蛛の糸」の主人公、犍陀多の姿が思い出される。天国と地獄というのは当時広がりつつあった格差の表現である。その途中で、天国への一筋の糸にすがって「自分だけはなんとか」と考えたことで犍陀多は助かることなく地獄に落ちていった。その後、芥川を襲い自死にいたらしめた「唯ぼんやりした不安」については論ずるところでないが、その後の生きづらい時代を芥川は見なかった。

すべての高齢者が九〇歳まで生きられるわけではなく、願っても女性で半分、男性は五人にひとりであるし、健康寿命はもつと短いことを考慮すれば、何がなんでも「九〇歳・現役長生」型人生を前提にしてすべての人がというのは酷な話ということになる。

「とって、みんながみんな「六五歳・引退余生」型人生を送りながら、「自分だけはなんとか」という思いで暮らすというのも罪な話。

酷でもなく罪でもない穏当な話にならないのかということである。

どうすればいいのか。

ここは盤を挟んでの自問自答の局面であるが・

「人生六五年」時代の「引退余生」を、あまり無理なくできる人は先に延ばしたらどうだろう。平均年齢である男性は「人生八〇年」からを、女性は「人生八五年」からを「引退余生」と捉えなおして、それまでを「現役長生」とするなら納得する人も多くいるだろう。

少なくとも「フレイル状態」(筋肉が衰えて活力に自在性が失われる段階)を自覚し、「有訴」(症状が元にもどらない)となり、「介護」を受けざるを得ない加齢プロセスを思えば、「フレイル」以前は「現役長生」でいけるのではないか。わが人生を「達人」として暮らすとしても個人の選択は優先されなければならないよ。

・ 盤を挟んでの沈黙考がつづく。

社会に対して自閉的な症候を「自閉症」というが、「地方創生」や「新地域支援構想」のこの時期に、「社会人」として自閉的なことを、巷では「*地閉症」というようだが。

いま「地域デビュー」することはむしろかしいことではない。現役時代からの「*地閉的暮らし」をそのままつづけることのほうが恥ずかしいと思えるほどだ。

高齢者はすべて「社会の被扶養者」として

＊みんなで渡った「霞が関の赤信号」

新世紀を迎えたころの決定的な政治的欠落は、国際的な潮流である「高齢化」について政治リーダーが高齢有識者とともに衆議して、高齢者意識の醸成と就業、健康づくり、社会参加、学習活動、生活環境、市場の活性化、全世代の参画といった分野ごとになすべき活動を検討し、「日本高齢社会グランドデザイン」として掲げて、増えつつける高齢者に呼びかけることをしなかったことにある。

わが国は一九九五年に「高齢社会対策基本法」（村山富市内閣）を制定して高齢社会対策のスタートをきり、一九九六年には「高齢社会対策大綱」を閣議決定（橋本龍太郎内閣）して、その後「高齢社会白書」を公開してきた。にもかかわらず、それから二〇年、どうしてこんなに対策の遅延を起こすことになったのか。

二〇〇一年、五年ぶりに見直された「高齢社会対策大綱」が閣議決定されたが、これは政府がすすめるべき対策であり、高齢者に参加を訴える指針ではなかった。新世紀の「高齢化」は国際的潮流であり、それを前にして、わが国でも「高齢化」に関する次のような事業活動が立てつけにおこなわれている。

一九九五年には「高齢社会対策基本法」（村山富市内閣）を制定

一九九六年には「高齢社会対策大綱」を閣議決定（橋本龍太郎内閣）

一九九九年には国連の「国際高齢者年」の記念事業（小渕恵三内閣）を全国的に展開

二〇〇一年には「高齢社会対策大綱」を見直し（小泉純一郎内閣）

二〇〇二年にはスペインのマドリードで第二回「高齢化に関する世界会議」。このスペインのマドリードでの第二回世界会議には、わが国からも代表が参加した。

この歴史的にも重要な時期に、当時の首相は「所信表明演説」（二〇〇一・五・七）で何と云ったか。

将来の高齢者増による「ケア」の負担増を取り上げて、「給付は厚く、負担は軽くというわけにはいきません」と言い放つありさま。

それが間違っているというわけではないが、否定的発言では構想にならない。対策が「高齢者」であり、「高齢社会」でなかったことに問題がある。シーリングがかかった予算折衝に当たって、焦眉の急が「介護・医療・年金」だったことは確かである。そこで、

「高齢者は元気ならみずから生きよ」

となった。内部議論はあったと推察されるが、収斂したベクトルは「無策」であった。

「給付は厚く、負担は軽くだけは、何としても保っていききたい」と訴えて、将来の財政難を説

きつつ、増えつづける高齢者層に、「自助と自律」の意識の醸成とともに、高齢者が暮らしやすい社会の創出への参加を求めるのが政治リーダーの構想力だったのではなかったか。

首相の「所信表明演説」を聞いて、天を仰いで慨嘆した学者や官僚や高齢社会活動家や高齢者がいたはずである。わたしもその一人であった。

このままだと、これは記したくないのだが、
「年若い負担がかさむと考える心優しい高齢者が、善意で死に急いでくれて、日本高齢社会は思いのほかスムーズに形成できました」

なんてことにならざるをえないのではないかと思われた。来たるべき国際的な「高齢化時代」を展望する時、先行高齢化国の日本として、その経緯はあまりにつらすぎる。

新世紀のはじめ、先の「所信表明演説」をしたのは、時の小泉純一郎首相である。

いま「原発の全面禁止」を訴えておられるが、「高齢社会対策」の延滞をつくった政治リーダーを代表して、将来展望を論じて国民に参加を求めなかった過ちを君子豹変して弁明してほしいものである。

今世紀はじめに、政界の「世代交代」の突風にあおられながら、みんなを誘導して「霞が関の赤信号」をむこうへ渡ったのは、優れた厚生大臣でもあった小泉首相だったのだから。

アベノミクスからは実人生で何の恩恵も受けず、広がった格差の底で、高齢者が、

「この国の将来の姿はもう見たくない。子どもたちに少しでも遺産を残せるうちに死にたい」

とつぶやき、エンディング・ノートを書くような国をだれが望んだだろう。

今世紀のはじめ、まだ先輩が残してくれた資産（隠し資産も）があったころ、政治リーダーは、一〇年後、二〇年後の「高齢社会」の姿を構想できなかつたのである。「多岐亡羊」というべきか、さがすべき羊がいないほうの路へ迷い込んでしまったのである。それ以後の歴代内閣もなお迷路のうちをさまよっている。

「高齢者は社会の被扶養者である」

と位置づけて、その上での「医療・介護・福祉・年金」の施策では国際的評価を得たし、平均寿命や健康寿命では世界一となっている。これら「高齢者対策」は率直に世界に誇るべきことなのである。

しかし、そのとき政治リーダーは同時に「日本高齢社会グランドデザイン」を衆議したか、と問いたい。

先の小渕内閣での「消費税」導入のとき、「社会保障」のための完全目的税にするために、当時の宮澤（喜一）蔵相を説いて認めさせた藤井（裕久）さんは、

「そういう構想力は政治リーダーにはなかった」

ともらしてくれた。

担当する官僚にそういう動きがまっただなかつたわけではないだろう。

二〇〇一年一二月、小泉内閣は五年ぶりの「高齢社会対策大綱」改定を閣議決定しているの

である。紙背まで読まなくとも、その記述の中に、優れた官僚と学者によってなすべき対策は埋めこまれている。政界が「世代交代」の大合唱の中にあっただとはいえ、政治リーダーが一〇年先の「高齢化」の状況に想像力が届かなかったといわれて弁解の余地はないだろう。

ライトを浴びる「平和団塊」の人びと

*「現役長生」型のニューフェースとして

ご存じのように、一九四五年の敗戦のあと、一九四七〜四九年に生まれて現在、約六五〇万人の人びとを、やや失礼と知りつつ「団塊の世代」と呼んできた。一九七六年に作家の堺屋太一さんが『団塊の世代』を書いて、そのポリウムゆえの社会的影響を指摘して以来の呼び名である。

しかし本稿が用いている戦後ツ子としての「平和団塊の世代」というのは、同じくいま二〇〇万人を超える一九五〇年と、終戦の翌年である一九四六年生まれのいま一四〇万人を加えて、二一世紀を迎えた一〇三七万人（二〇〇〇年一〇月）、いま九七〇万人（二〇一五年四月）の戦後ツ子の人びとを指している。

「平和団塊の世代」の人びとは、「現役長生」型高齢者のニューフェースである。産業人としては定年を機にギアをトップから下げたかもしれないが、消費者としてのポリウムもエネルギー

―も、生活者としての生活感性の高さも変わらない。

時代の要請を受けて、「人生九〇年（六五十二年）時代」の第三期のステージにライトを浴びて立つ、若き高齢者「平和団塊」のみなさんの動向に本稿は注目している。敬意をもってその歴史的活動を見守っている。

ここでその主役になる「平和団塊」のみなさんの横顔をすこし紹介しておこう。

一九四六（昭和二一）年生まれ。

仙谷由人（政治家） 鳳蘭（俳優） 松本健一（作家） 宇崎竜童（歌手） 美川憲一（歌手）

北山修（歌手） 新藤宗幸（政治学） 柏木博（デザイン） 岡林信康（歌手） 堺正章（T

Vタレント） 坂東真理子（官僚） 田淵幸一（プロ野球） 菅直人（政治家） 秋山仁（数

学教育） 藤森照信（建築史） 倍賞美津子（俳優）・

一九四七（昭和二二）年生まれ。

橋本大二郎（政治家） 衣笠祥雄（野球評論） ビートたけし（TVタレント） 星野仙一（プ

ロ野球） 尾崎将司（プロゴルフ） 西郷輝彦（歌手） 鳩山由起夫（政治家） 津島佑子（作

家） 千昌夫（歌手） 上原まり（琵琶奏者） 荒俣宏（作家） 中原誠（将棋棋士） 小田

和正（歌手） 北方謙三（作家） 金井美恵子（作家） 西田敏行（俳優） 森進一（歌手）

池田理代子（漫画家） 布施明（歌手）・

一九四八（昭和二三）年生まれ。

高橋三千綱（作家） 輪島大士（大相撲） 毛利衛（宇宙飛行士） 里中満智子（漫画家） 赤川次郎（作家） 五木ひろし（歌手） 赤松広隆（政治家） 江夏豊（プロ野球） 都倉俊一（作曲家） 沢田研二（歌手） 上野千鶴子（女性学） 井上陽水（歌手） 鳩山邦夫（政治家） 橋爪大三郎（社会学） 糸井重里（コピーライター） 由起さおり（歌手） 舛添要一（都知事） 谷村新司（歌手） 内田光子（ピアニスト）・・

一九四九（昭和二四）年生まれ。

村上春樹（作家） 鴨下一郎（政治家） 林望（国文学） 海江田万里（政治家） 高橋真梨子（歌手） 平野博文（政治家） 武田鉄矢（歌手） 高橋伴明（映画監督） 萩尾望都（漫画家） ガッツ石松（ボクシング） 矢沢栄吉（歌手） 佐藤陽子（バイオリニスト） 堀内孝雄（歌手） 松崎しげる（歌手） 森田健作（政治家） テリー伊藤（演出家）・・

一九五〇（昭和二五）年生まれ。

残間里江子（プロデューサー） 舘ひろし（俳優） 和田アキ子（歌手） 坂東玉三郎（歌舞伎俳優） 東尾修（プロ野球） 中沢新一（宗教学者） 池上彰（ジャーナリスト） 姜尚中（政治学者） 八代亜紀（歌手） 辺見マリ（俳優） 塩崎恭久（政治家） 梅沢富士男（俳優） 岩合光昭（写真家） 綾小路きみまろ（漫談家） 神田正輝（俳優）・・

この約九七〇万人の一人ひとり、敗戦後のきびしい生活環境の中で生み育てたご両親の思いを想い起こして、本稿は新世紀の国際平和を支える「平和団塊の世代」と呼んで注目してき

た。「団塊世代」では即物的にすぎて、また「平和世代」では理念的にすぎて、いずれも不満かもしれないが、あわせて「平和団塊の世代」と呼ぶのをお許しねがいたい。

先進諸国の同世代の人びととともに、この「平和団塊の世代」（戦後っ子）が、平和裏にみずから安心して後半生をすごせる社会を形成し、長寿を全うすることが、前世紀の戦争の惨禍と混乱の中で両親が希い求めた「平和に生きる」ことの証にちがいないからである。

わが国の高齢者の一人ひとりが世紀をまたいで、人類の普遍の願いである長寿を体現している。こんな役回りは願っても求めても得られるものではない。「新しい人類史」をつくっているという実感を大事にしてほしい。

そして二一世紀半ばの二〇四七年、「日本国憲法」は制定一〇〇年を迎える。

平和に徹した高齢化先進国の日本が持ちきたった誇るべき「世界平和の証」となる。

そのとき一〇〇年保持しつづけて「百寿」で迎える平和憲法は、国際社会からスタンディング・オベーションを受けて歓迎されることになるだろう。

「日本国憲法一〇〇周年記念」祝典。

この世紀のドラマまで、あと三二年である。「平和団塊」のみなさんは、亡き先輩の願いを胸にし同輩の希いを引き連れて、歴史の証人として参加するために、「人生一〇〇年」をめざして歩むことになる。

二 ひとりの住民・市民として

熟成期を共有する「地域シニア文化圏」

*何十万という水玉模様が存在のかたち

本稿では「地域シニア文化圏」ということばを、強いグリップ力をもつ高齢期キーワードとして位置づけている。高齢者にとっての「家庭外の居場所」といつてもいい。

「シニア文化圏」というのは、「六五年」をすごして、それぞれにわが道の業績を積み上げてきた高齢者が、異なった成果を得た人びとと出会い、お互いに経験や業績を語り合い、高齢者同士でなければ味わい得ないレベルの理解を共有する「高齢期の文化拠点」といった程のところ。

少し排他的に言えば、「利」を望まずに、あるいは望んでも優先せずに、「文を以って友と会す」（曾子のことば、『論語』から）といったところ。少し加えていえば、青少年や中年の存在を脇に置いて、「おとなが文化を語っておとなの文化を感じる場」といったほうが分かりやすいかもしれない。

そう気づいていないだけで、すでにさまざまな形で存在しているから、とくに新しいことを言い出しているわけではない。ここではそれを高齢期を意識した視点から捉え直すことになる。「あ、これはシニア文化圏だ」と意識することで、高齢社会のなかにそれぞれに個別な特色を

もって重なった水玉模様のような印象の存在として見えてくればいいのである。

語られる「シニア文化の内容」とはどういうものか。

「環境」とか「文化」というと、どうにでも広くも狭くもなるが、狭く考える必要はないだろう。学術的な領域から芸能・スポーツ、暮らしの知恵に至るまで、万般にわたってみんなが共有しているもつとも広い意味での「文化」のイメージでいい。少し限定するとすれば、六五歳を経た高齢期にある人が関心をもって考え、語り、感じとり、作り、表現した事象・事物を主に対象とする、ということぐらい。

二〇一二年三月に亡くなったが、同時代人として並みならぬ思索の根っこを持っていた吉本隆明さんのような人の、一九六〇年代の状況下で「ロゴス」（統一法則を内包することば）の混乱にまきこまれながら柔軟で示唆的であった『共同幻想論』などから、思索の根っこをそのまま曝した『老いの流儀』などの近作にいたるまでの作品を採り上げてみるのもおもしろい。

また『蓮如』を書いた五木寛之さんは、古代インドの「四住期」から想をえて人生のありようを説く『林住期』を書き、最近には『新老人の思想』を書いた。井上靖さんの『孔子』や瀬戸内寂聴さんの『釈迦』といった史上の人物についての作品は、作者の生き方と重ねて、さまざまな角度から語り合える素材となる。曾野綾子さんも『人間にとって成熟とは何か』で終末期への心がまえをていねいに説く。近くは画家の篠田桃紅さんの『一〇三歳になってわかったこと』が話題になった。こんな著作からみんなの経験と知識が飛び交えばいい。

文化圏の「圏」としての大きさは、どうだろう。

テーマや参加する人にもよるだろうが、「最小規模の多数」である七人一人といったところが基本だろうか。私的な仲間の会としてみかける四、五人の会では、少ないために変則や異見といった「文化を生じる」要素を含み込みづらいが、時にゲストを呼んでみることで新たな「文化圏」になるだろう。

また多すぎると散漫になる。わかりやすい例としては、多くの会議や学会の総会そのものは高齢者が中心の「シニア文化圏」ではあるが、その後の「二次会」のほうを基本型と考えたらどうだろう。二次会なら五、七人でも談論風発、結論を出す必要もなく、話題はさまざまに移っていく。ひとつのテーマをめぐる場合もあるが、意見が二つに割れたり三つになったり、二つの話題が混ざって語られたり、また一つにもどったりする。その自在性の中に「最小規模の多数」による発見と味わいがある。

高齢者同士が自在に「文化を語って文化を生じる場」が「シニア文化圏」であり、高齢期の人生の成熟・円熟とともに実感しあえる愉快な「高齢期の居場所」なのである。

高齢期になって親しくつきあえる人といえば、だれでも「学友」と「同僚」と「親族」の三点セットのうちに、幾人もの信頼する相手を持っているだろう。

しかし実はこの三点セットだけでは長い高齢期の人生を充足して送るには心もとないのである。心もとない理由は、どれも高齢期になって自らが選んだものではなく、これまでに与えら

れた環境下で得た人びとであり、外にむかって閉じた仲間だからだ。

高齢期に心躍る人生の充足を得るには、さらに地域や目標とする分野からあらたに加えて五つ七つの「シニア文化圏」での活動が、高齢期の人生に変化と厚みのある成果を刻んでいくことになる。「シニア文化圏」だからといって「青少年」や「中年者」を排することはない。中心になる構成メンバーが高齢者であり、中心テーマが高齢者が対象とするものということであつて、とくに次の成員となる中年の人びとには開かれたものでいい。

ほどよい「シニア文化圏」の存在が、一人ひとりの「第三期ステージの人生」の充足と重なるであろうことは確かである。

涌出期にある高齢者活動

*リードする「昭和丈人層」の人たち

昭和生まれの高齢者層が、あるべき存在感を示していないわけではない。わが国の「高齢者活動」は湧出期にあつて、その中心にいてリードしているのは、まぎれもない昭和生まれのみなさんなのだから。長い苦闘の経緯をもつ高齢者ケアとしての「介護」「医療」「福祉」の分野はもちろんのこと、高齢者活動は、実にさまざまな領域へと広がっており、際立つ分野だけでもこれほどにある。みなさんもいくつかの分野にかかわっているだろう。

各種の生涯学習（趣味、生きがい、健康）。

虐待防止、遺言相談。後見人相談。

高齢者雇用、起業支援。

年金、貯蓄・投資、マーケット情報、保険。

シニア向け新商品開発、介護福祉機器、電化製品、移動用の車・乗り物などの製造・販売。
ショッピング、通販、宅配。

ファッション、料理、食品、レストラン、居酒屋。

ケア付き住居、いなか暮らし、住宅改修（バリアフリー）、家具・用具。

パソコン教室・通信、カルチャー講座・セミナー・シンポジウム、イベント。

シニア向け新聞・雑誌・広告、テレビ・ラジオ番組。

短歌・俳句・川柳、ナツメロの会、自分史、楽団、手づくりクラフト。

ゲートボール、テニス、ゴルフ、太極拳・ヨガ、碁・将棋、ゲーム。

環境美化、伝承活動、世代交流。

旅行、ホステル、国民宿舎、海外ツアー。

国際交流・・・などなどである。

組織の名称はといえば、「シニア」が圧倒的に。「老人」や「シルバー」といった先輩格のもの、しっかりと根をはって活動している。

「老人」ということばは、老練、長老、老師など経験を積んだ高齢者をもいうのだが、どうも旗色がわるいのは、長く「老人ホーム」や「敬老会」などが随伴してきたために「高齢弱者」をねぎらうというニュアンスが働いているからだ。

「敬老」には「敬老尊賢」という味わいのあるすつくと立ついいことばもあるのだが。そのあたりの欠落をフォローするために本稿の「丈人」が意味合いをもつことになる。

「老人のつく活動組織」での代表は「老人クラブ」である。敗戦後間もない一九五〇（昭和二五）年に発足して以来、自治体と連携しながら地域の高齢者の生きがいと健康づくりに貢献してきた。「全国老人クラブ連合会」（全老連）には、一一万クラブ、約六七〇万人の会員が参加。「友愛訪問」「伝承活動」「環境美化」「世代交流」といった幅広い活動に乗り出している。

本稿が「老人力」や二〇一三年六月に亡くなったなだいなださんの「老人党」の活動に関心を持ちながら、新しい「高齢化」の活動に「丈人力論」を展開しているのは、既成の活動が収容しきれない高齢者活動に注目しているからで、決して他を否定的にみているわけではない。なかには、高年期の人生は明日をも知れないことに実感がある、「九〇歳をいうのは結果であって意味がない」という生き方もある。高齢期の生き方は多彩であっていい。高齢者みんなで何かをとというのは、いささかキツイ話だからである。といって、みんながみんな内向的になつてしまうのは、社会の姿として困ったことになる。

シルバー&シニア&エイジング

*多種多様なカタカナ団体

高齢者の活動の湧出期にあたって、さまざまな分野で新しい活動が進められている。そこでカタカナ語の団体・協会が続出している。

ここで立ち入ってカタカナ語に触れるのは、高齢者活動は、さまざまな方向でそれぞれの立場で、熱心に活動している人びとと組織に支えられているからで、どれかひとつとはいかない。それどころか多いことはいいことなのである。まだまだあるのだが、多岐にわたることを知っているただくためにほんの一例として紹介であり、失礼があればお恕しねがいたい。

「シルバー」

「シルバー」は、グリーンやブルーといった「アシッド・カラー」（柑橘類の色）などに対する色彩の比較から生まれた和製語である。

高年者を「シルバーエイジ」としてとらえて、活動的なイメージを付加して、運動・旅行・講座などの研究所や教室が用いている。高齢者の能力を活用する「全国シルバー人材センター事業協会」や「シルバーサービズ振興会」などは定着している。

「アクティブライフ」

「アクティブライフ」は、活動的な暮らしをめざすことで、高年者主体のボランティア・グル

ープが用いている。「ニッポン・アクティブライフ・クラブ」など。

「エイジド」・「エージング」・「エイジレス」

「エイジド」や「エージング」などは、それぞれに年輪を刻んで到達した営みが意識されて使われている。

「エイジド」は、ワインやギターやコーヒー豆での利用が優勢だが、経験を積んで熟成した意味で、これも高齢者を支えるボランティア組織やNPOが用いている。

「エージング」は、老化がすすむことを意識して「アンチエージング」として医療や美容外科など、もつと広く「わかづくり」ほどの意味で用いられる。「ウエルエージング」や「アクティブ・エージング」として高齢期を積極的に受け入れる立場を示している。「エージング総合研究センター」や「日本ウエルエージング協会」は歴史をもつ活動をおこなっている。

「エルダー」は、旅好きのおとなのための「エルダー・ホステル」が世界一〇〇カ国に開設されていて、学習と旅をあわせた高齢者対象の活動をしているのが目立つ。「日本エルダー協会」や「エルダーホステル協会」など。

「エイジレス」は、年齢にとらわれないという意味で「エイジレス・デザイン」「エイジレス商品」「エイジレス・ライフ」などとして広く用いられている。

「ユニバーサル」

一方に、高齢を意識しながら人生に年齢は無関係であり、それを超えたものであるという意

味での「ユニバーサル」が知られる。

「ユニバーサル」は、だれもがという意味合いで、とくに「ユニバーサル・ファッショ」が、高齢者にも障害者にも快適で喜ばれるファッションとしてバリアフリーが意識されて用いられている。「ユニバーサル・ファッション協会」など。

「高齢者活動団体」

活動の広がりを見るために紹介がカタカナ語に片寄ってしまったが、とくに福祉を核としながら活動している「高齢者活動団体」は枚挙にきりが無い。

その推進役になっている組織・団体の存在を見落として先にいくことはできないので、ほんの少例にかぎるが紹介しておきたい。これも失礼があればお恕しねがいたい。

福祉・介護・市民後見人などの「さわやか福祉財団」「ダイヤ高齢社会研究財団」「全国介護者支援協議会」、医療の「国立長寿医療研究センター」、高齢者・加齢学研究所の「東京都健康長寿医療センター」（老人総合研究所と老人医療センターが統合）、「日本応用老年学会」「シニア社会学会」、高齢者雇用の「高年齢者雇用開発協会」「高齢・障害・求職者雇用支援機構」「日本高齢者生活協同組合連合会」「高齢社」、高齢女性の「高齢社会をよくする女性の会」、毎年「ねんりんピック」によって活力ある長寿社会をめざす「長寿社会開発センター」、生涯学習の「生涯学習開発財団」、住宅に関する「高齢者住宅財団」、高齢活動人材養成の「社会教育協会」「高齢社会検定協会」など。

そして一九九九年の「国際高齢者年」の国民運動を機に設立された「日本高齢社会NGO連携協議会」(JANCA)にはNGO(非政府組織)・NPO(特定非営利活動法人)を中心にした多くの活動団体が参加して運動を支えている。

そして何より心づよいことは、「高齢社会」形成の主役を体現しながら活動する組織を支えているのが、先の大戦の惨禍と戦後の混乱を身をもって知っている昭和前期・中期生まれの「昭和丈人層」の人びとであることである。

三 ひつらの国民とつた

ああいう国になりたいという国の姿

*さまざまな立場の高齢社会構想

すでになる述べてきたが、いまこそ「高齢者が新たな歴史をつくるとき(世紀)」である。

ここでは将来の日本の姿について、次の方々の声に耳を傾けよう。

紹介している方々は、それぞれに確かなこの国の将来像をお持ちであり、静かに話されている声を聞いているうちに、将来のその姿が見えてくる。

まずは「高齢社会をよくする女性の会」の樋口恵子理事長の将来像から。

樋口さんの将来像は、歴史上で初の「人生一〇〇年社会」である。

女性リードで「一〇〇歳社会」をめざす樋口さんご自身は、まだ「傘寿期」に到達したばかり。お仲間とともに初代として「人生一〇〇年社会」の到達点を見据えている。一〇年を差し引いて内閣府が「人生九〇年」としたのは、男性型であると評しながら。

「いまわたくしたちは、「人生一〇〇年社会」へという、人類の歴史のなかで初めての長寿を普遍的に獲得した社会を生きる。そしてそれにのっとった地域であろうと国であろうと、生きる主人公は人間であります。その人間の幸せのために、わたくしたちは初代として今日も一歩一歩努力をしているのだと思うと、「なかなかいい時に生まれちゃったじゃないか」と、わたくしなどはよろこばしく思うわけでございます」(内閣府「高齢社会フォーラム in 東京」基調講演「シニアの社会参加で世代をつなぐ」二〇一三年七月)と明快に述べておられる。

次は「さわやか福祉財団」の堀田力会長の講演から。

二〇一四年七月二九日、内閣府主催の「高齢社会フォーラム in 東京」での講演で、堀田さんの声は哽れていた。この夏は東奔西走といった忙しさで、全国の自治体をまわって「新地域支援構想」について説明・講演をしておいでだったからである。「支えられる高齢者」のための介護支援など



の事業が、「地域医療・介護推進法」の成立（二〇一四年六月）とともに二〇一五年四月から地域自治体に移行した。これまで温存されてきた「支える側の高齢者」の地域での自主参加が求められることになるからである。

「毎日が日曜日」といった暮らしに慣れ親しんでいる退職後の男性たちに、堀田さんは「毎日が月月火水木金金」といった忙しきで、「社会参加による共生の文化」を説いておられる。住んでいる地域に関心が薄く、いずれ「介護・医療」のときだけは地域に頼るといふ暮らし方が「恥ずかしい」と感じるような風習を「共生の文化」と呼んで、元気な高齢者への提言としている。

住み慣れた地域で高齢者が「地域協議会（体）」に参加して、自治体ごとに配置される「生活支援コーディネーター」を支えて、自治体の事業を支援しようというものである。

元東大学長の小宮山宏プラチナ構想ネットワーク会長は、「産業革命からプラチナ革命へ」を説く。江戸時代にはすでに近代への準備を終えていたアジア唯一の先進国であったわが国は、いまや大量生産時代を終えて新しい価値QOLである「省エネ時代」にはいつている。「プラチナ社会」というのは、成熟社会における成長の一つのモデルであり、先進国として直面する課題の解決と新たな可能性の創造によってもたらされる、豊かで快適でプラチナのように威厳をもって光り輝く社会と説明している。

プラチナ構想ネットワークは、毎年、優れた事例を選考してプラチナ大賞・優秀賞ほかを贈呈して活動の推進につとめている。第一回（平成二五年）



は大賞に、海士町（島根県隠岐郡）の「魅力ある学校づくり×持続可能な島づくり」島前高校魅力化プロジェクトの挑戦」が、第二回（平成二六年）は、ヤマトホールディングス株式会社の「地域に密着したヤマト流CSV『まごころ宅急便』」が選ばれている。

東大高齢社会総合研究機構の秋山弘子特任教授は、高齢社会活動の成功事例を集めた「リソースセンター」の設立を提案しておられる。東大リーディング大学院での国際的人材育成や「高齢社会検定試験」（高齢社会検定協会）による「高齢社会エキスパート」の認定、柏市でのまちづくり、RISTEX「コミュニティで創る新しい高齢社会のデザイン」の領域総括として全国一五プロジェクトの推進などを通じて成果を積み上げておられる。「ああいう国になりたいという国」がつくれるかを課題として。

政界の長老、藤井裕久民主党顧問はクオータ制でも参議院に残っていただきたい高齢政治家のおひとりである。藤井さんは引退したあとも「戦争のない社会を守りつづける政治」「歴史に学ぶ政治」の課題を実践しておられる。民主党近代史研究会のオーブンフォーラムはその実現の現場のひとつ。三谷太一郎、加藤陽子講師などを呼んで「昭和初期の歴史」に「戦争」への萌芽をさぐっている。安倍政権の「歴史に学べない」方向に危惧を深めながら。

（これらの方々の講演は、web『月刊文風』二〇一四年八月号に「特集」



を組んでいるので開いてみていただきたい。)。

高齢者が自主的に社会参加しないかぎり、「日本高齢社会」の形成は遅延しつづける。公助の負担は増え、後進世代からは自助の要請が強まることになる。いまは「地域参加」によって「共生の文化圏」というしくみづくりに立つ好機といえる。

「高齢社会グランドデザイン」を掲げよう

*政治リーダーの構想力が問われている

わが国の高齢者はいま、国際的な注目を受けながら、「先進的高齢社会」を成し遂げるべくそのプロセスを体現している。

とはいっても、これまでのところではなお各地各界で繰り広げられるはずの「モノ・サービス」づくりや「居場所」づくり、「世代交流」のしくみづくりなどどれもが延滞ぎみである。どう参加しているかが分からず、高齢者が保持している知識・技術・資産がスムーズに動いていない。高齢者みずからが暮らしやすい社会の達成にむかって、「地域生活圏」づくりを意識して参加していないから、先駆的な活動による成果を共有し享受しているという実感や共感を持つことができないでいる。

それはなぜか。

何度述べてきたことか。「日本高齢社会のグランドデザイン」が掲げられていないからだ。

産・官・学・民の衆知をあつめて構想せねばならず、それを推進するのが政治リーダーの役割であり、平和戦略であり、それにふさわしい社会体制づくりである。そのためには専任の高齢社会担当大臣が内閣府にどっしりと座していなければできないことである。

ここでの欠落は「高齢者対策」ではなく「高齢社会対策」であり、それを推進する政治リーダーの不在である。政治は「社会保障」の財源を用意してくれたが、肝心の「日本高齢社会グランドデザイン」を衆議して掲げることをしてこなかった。先にも記したが、「消費税」導入のとき、「社会保障」のための完全目的税にするために務めてくれた藤井裕久民主党顧問は、

「そういう構想力は政治リーダーにはなかった」と率直に述懐しておられる。

「先行高齢者国」が「先進高齢社会」をどう成し遂げるかは、国内はおろかアジア地域どころか世界規模で注目されており、まずは「高齢社会グランドデザイン」を公開し、その達成にむけたプロセスと成果を国際発信することによって納得されるのである。そういう時期なのに現状はそういう姿に向かっていない。

二〇一二年一月から二〇一三年八月まで、「社会保障制度改革国民会議」が検討したのは、「医療・介護・福祉・年金・少子化」であり、そのうち年金は結論を出していない。つまり本格的な「高齢社会構想」の議論には踏み込んでいないのである。座長を務めた清家篤慶応義塾

大学塾長は、「高齢社会対策大綱」を検討し改定した際の有識者会議で座長をつとめており、そのあたりのことは熟知しているはずであるが、多数意見を尊重する立場上、発言されていない。一九九五年の「高齢社会対策基本法」制定以来、二〇一五年は二〇年になる。推進の中心に担当大臣を置いて、国会で衆議して、国際的関心に応える「日本高齢社会ブランドデザイン」を構想として掲げるべきときである。

基本法二〇年を専任大臣のもとで

*内閣府に「高齢社会対策」担当の動線を

最近の「高齢社会対策」の担当大臣を見てみよう。

毎年出されている『高齢社会白書』（内閣府刊行）の閣議への提出者をみると、平成二一年度版は小淵優子大臣が、二二年度版は福島みずほ大臣が、そして二三年度版は蓮舫大臣、二四年度版は小宮山洋子大臣、二五年度版・二六年度版は森まさこ大臣が閣議決定時の担当大臣となっている。連ねてみると明らかに「少子化・高齢化」を合わせ担当する人選であり兼任であり、それも「少子化対策」の方が主であることが知られる。

民主党政権時代だけで九人の担当大臣がいた。そのことを議員どころか閣僚どころか本人すら意味合いを知らなかったのではないか、と思われるほどなのである。

参考までだが、九人というのは、福島みずほ、平野博文、荒井聡、岡崎トミ子、村田蓮舫、細野豪志、村田蓮舫（再）、岡田克也、中川正春各議員。時節がらその重要性を知っていれば、少時とはいえ内閣改造時に兼任で担当となった岡田副総理は、おそらくそれ相応の対策をとったことだろう。

これは記すのをためらうが、改定した「高齢社会対策大綱」を閣議決定した野田（佳彦）総理も、高齢者の活動がいまの社会にもたらす有意な影響には触れているが、それが高齢者自身の実人生を活発にし新しい社会の形成に向かうことには、若き総理（五五歳）には理解が及ばなかったようである。それは六〇歳の安倍総理にもいえることだが。

これはいったいどうしたらいいのか。

担当大臣としてしごともなく、予算も少なく、組閣時に「高齢社会対策担当大臣」として辞令も出ないために、恒例の組閣後の記者会見でも関連する質問が出ない。「日本高齢社会」の形成は国際的・歴史的・大事業なのに、国のリーダーはその重要性を認知しないままである。

内閣府内部の扱いも「共生社会政策」の一分野として、内閣府政策統括官（共生社会政策担当）が担当している。「高齢社会対策担当」の参事官や政策調査員がいるにはいるが、兼務だったりするから、「高齢社会対策」を担う太い動線が内閣府内に整っているとはいえない。要するに主要な職務として扱われなくなつて久しいのである。

「高齢化」を一過性のものとし、「少子化」を恒常的なものとする施策は、この国の将来を二重

に誤ることになる。遅れを取り戻すには、内閣府内に「高齢社会対策」を担当する太い動線を形成して、高齢社会推進のしごとを進めねばならない時期にある。「スポーツ庁」よりは「高齢社会庁」の設置が先。世紀を通じた国際評価につながる「高齢社会対策」を優先すべきなのにもかかわらず、国会議員は、その不在になお気づこうとしない。

ここは三三〇〇万人の高齢者が、声を合わせて、

「高齢社会対策の専任大臣と強力な部局を！」

「日本高齢社会グランドデザインを掲げよう！」

と叫ぶ必要がある。

世界の高齢者が期待する「日本高齢社会」形成への新たな烽火を掲げて戦うために、「衆志成城」の時である。

世界トップで「長寿社会」の達成をめざす

*すべての世代が等しく参加して

「高齢化先行国」（先進国とはいえない）として「日本高齢社会」を形成する事業は、一九九五年に「高齢社会対策基本法」を制定してまずまずのスタートを切った。

それから二〇年、まことに残念なことに、この史上初の社会を創出する事業は、延滞しつつ

けてきたのである。いまそのことを責め立てても後悔しても仕方がない。

こう前向きに考え直したらどうか。

「日本高齢社会」形成の事業は、世界で初めてのゆえに、二〇年の準備期間を要した。「高齢化率」二五%を待って、「四人にひとり型の高齢社会」の事業として本格的な実現にはいった。

戦後生まれの「平和団塊の世代」の約九七〇万人の参加を待って、という事情もある。

今から成功事例をつくることは可能である。何もしないですごせば国際的な失敗事例となる。そんなことはあってはならない。

一九九九年の「国際高齢者年」のあと、仔細にこの国のありようを観察してきた本稿は、「団塊の世代」が定年を迎えるとき、老後が穏やかな姿になっていないだろうことを予測してきた。

「日本型高齢社会」は、この国で暮らす高齢者一人ひとりによる意識的自発的な活動なしには成り立たない。個人がその総体的な姿を推察するのはむずかしいが、達成に向かうこの国にどういう変化をもたらすかを見てみよう。

それは行く先明るい展望でなければ意味がない。

二〇二〇年（東京オリンピックの開催年）ころまでの内輪な推測としてだが、高齢者の意識的自発的な生産活動・消費活動・社会活動によって、次のようなことが達成されるだろう。

・一過性の「アベノミクス（女性と若者の経済）」効果が衰落して失速にむかう日本経済を、「エイジノミクス（高齢化経済）」の製品・サービスによって救済するであろう。

・「超一〇〇〇兆円」の財政赤字の解消、つまりプライマリーバランスは、持続的な高齢化社会の推進によって大幅な縮小ができるであろう。

・「超一四〇〇兆円」といわれる家計黒字は高齢社会形成のための出資に向かうであろう。

・「アジアの先進国」として途上国が範とする日本でありつづけるであろう。

・「少子化」に歯止めをかけ、子育てで繁忙な女性の就業支援ができるであろう。

・「好事門を出でず、悪事千里を行く」という世相を防止できるであろう。

・「高齢弱者」の不安を払拭してだれもが安心して暮らせる「長寿社会」をもたらすであろう。

・世界がモデル事例とする「日本長寿社会」日本型高齢社会」が姿をみせているであろう。

・数多くの国際機関を招請し、常態として各種の国際会議・イベントが行なわれ、世界の人がとが「一生に一度は訪れたい国」としてやってくるだろう。

のちの歴史書は、誇らかに、こう記すであろう。

「二一世紀初頭の日本は、先行国としてアジアの近代化（モノの豊かさの共有）に貢献し、世界大戦ののちに平和の証として灯した「平和憲法」を一〇〇年護持して「平和裏の高齢社会」を世界に先駆けて実現した。自助、互助、共助、公助のしくみを持つ地域社会のありようは、後進諸国にモデル事例を提供し、宗教にも民族にも男女にも貧富にも、そして年齢にも差別をしない民主主義国家を達成した」

国際的にも注目され納得されるような、「長寿社会」日本型高齢社会」の形成は、高齢者とす

すべての世代の参加によって達成され、後を追って高齢化を迎える途上国や後人にとって、「日本型モデル」となるべきものである。

四 ちよっとばかり国際人

国民性としての「ホスピタリティー」

*自然にあふれ出る「おもてなし」の心

二〇二〇年のオリンピック東京招致が決まって準備が進んでいるが、二〇〇二年六月に日韓の共催でおこなわれたサッカー「ワールドカップ」の折りの国際的な熱気はなつかしい。

ホスト国として、参加各国チームの選手を迎え入れ、みごとに「ホスピタリティー」（「おもてなし」の心）を發揮した二八市町村。

「アリガトー」は世界語になる勢いだったし、街の清潔なこと、花の多いこと、礼儀ただしきこと、どこにも温泉があること、列車が時刻通りに動いていること、スシが「トテモ、オイシイ」など、物価が高いことを除けばホスピタリティーは十分に実証されたのだった。

競技場の内と外で示したように、日本各地の人びとには世界中から訪れた人びとに、おのずから溢れ出る親和の感性によって国際交流を友好的にすすめることができる潜在力があること

を、世界に証明する機会となったのだった。

子どもたち、女性、高齢者が、それぞれの地域でみせた国際交流での「お国ぶり讃歌」であった。とくにアフリカのカメルーン・チームを迎えた大分県の中津江村と、二〇一三年に引退した人気NO1だった「ベツカム様」がいるイングランド・チームを迎えた兵庫県の津名町が話題になったが。

おのずから表れる「ホスピタリティー」（「おもてなし」の心）はどこから生じるのか。

長く鎖国した島国であったことで、地域に潜んでいる国際交流への期待感には、計り知れないものがあるように思われる。これこそが地域の資産として生かされるべき地域パワーなのではないか。「地域から地域へ」のつながり、とくに海外の都市とのヒトとモノの交流には、労苦をはるかに越える成果が実現される可能性が見えている。

「アベノミクス」（想定外の「金融緩和」）による円安効果で、海外からの旅行者が増えている。とくにアジアからのお客が多いというのはうれしい。

日本企業は海外進出で、アジアの民衆の暮らしの近代化、豊かさに貢献している。アジアの人びとが「暮らしの先進国化」を成し遂げたわが国に来てくれることで、いつそう「平和の国」の評価がアジアの人びとに理解されることが何よりうれしい。

わが国の地域の「ホスピタリティー」（「おもてなし」の心）を支えているのは、四季の移ろいをじょうずに受け入れながら温和な感性を大切に暮らしている人びと、だれに対しても

等しく親切な高齢者のみなさんである。

その心の深い層に培われている繊細さや優しさは、四季折り折りに変化する風物との出会いがもたらしてくれた自然の恩恵（天恵）といえるものに違いない。

人生に何度となく繰り返される季節との出会い・・・。

▪ 春は桜前線（三月～五月）が北上し、秋には紅葉前線（一〇月～一二月）が南下する。

▪ 南からは春一番が吹き荒れ、北からは木枯らしが吹き抜ける。

▪ 八十八夜の晩霜を気にかけて、二百十日の無風を祈る。

▪ 南の海に大漁を伝えていわし雲が湧き、北の海にぶり起こしの雷鳴が轟く・・・。

わが国の自然は、みごとに四季の変化に調和がとれている。それはまた海の幸・野の幸・山の幸を豊富にもたらしてくれる。「平分秋色」というが、秋には収穫を等しく分け合い、奪うよりは譲り合い、見捨てるよりは助け合う、といった「国民性としての和の心」（温和、穏和、調和、親和、平和、協和、総和・・・まだある）が、自然のうちに育まれている。と、これは海外の日本研究者が等しく指摘するところ。

だれかれの分け隔てなく萎えた心を励まし、痛んだ身を癒してくれる風物とくに温泉や特産物に事欠かない。それとともに先人が貯えてくれた歴史・伝統遺産も数多く残されている。

二〇一三年には、富士山が世界文化遺産に登録された。自然遺産ではなく文化遺産であることに納得がいく。また「和食」が世界無形文化遺産に登録された。「和食」は、さまざまな知識

や技術が人から人へと受け継がれ磨きあげられて、「地場産業」や「お国ぶり」として暮らしを豊かにしてきたのである。

だれかれの分け隔てなく等しく親切な高齢者。「日本高齢社会」は高い国際評価を受けるであろうし、長寿者への敬愛の情は、他国の人びとからも多く寄せられるだろう。

自治体が産み出す「国際貢献」

＊リピーターに「国土を四倍に見せる法」

自治体が海外にふさわしい相手を見出して、住民同士が親しく行き来し、異質な文化コラボや特産品の共同製作をおこなう姿からは将来への成果がうかがえる。ホームステイで訪れる青少年は日本を好きになって帰ってくるにちがいない。

常に開かれた不凍港のように頼りがいがある存在としての小村、中町、大都市。それぞれの海外との交流は将来かならず双方の特性や豊かさを生み出す源泉となる。

いま「姉妹・友好自治体」は一六七〇ほどあるが、多くはない。複数都市にすることと、合併企業や物産の共同開発といった経済活動や個別分野のさまざまな交流が進めば、数も内容的にもおおいに広がるが予測される。

とくに長い民間交流の歴史をもつ日本と中国の場合には、国家間の不和・齟齬の時期を乗り

越えて、すでに三五〇余の「友好都市」があり、信頼をつなぎ、友好の成果をもたらしてきた。太い交流のパイプになっている。戦後これまでに研修生として訪れた中国側の多くの若者が、いまや各地の都市で第一線で活躍している。

いくつか友好都市の例をあげれば、首都の東京（各区も）と北京（各区も）、近代港湾都市の大阪・横浜と上海、神戸と天津、福岡と広州、歴史文物の京都・奈良と西安、名古屋と南京をはじめ、産業では鉄の大分と武漢、石炭の大牟田と大同、伝統物産の金沢と蘇州、瓷都の有田と景德鎮、ぶどうの勝沼とトルファン、牡丹の須賀川と洛陽、紙の富士と嘉興、酒づくりの西宮と紹興といった特産物。そして人物を介した絆による交流では留学生魯迅のふるさと紹興と先生藤野巖九郎の生地あわら、亡命期の郭沫若にちなむ市川とふるさと楽山、中国国歌の作曲者聶耳の終焉の地である藤沢と生地昆明、孔子ゆかりの足利と濟寧など幅広い関係を持つ。そしてそれを地道に支えているのは、長い日中交流の歴史を思い、大戦時の不幸な記憶を忘れずに信頼を積み上げてきた両国の高齢世代のみなさんである。

「国際交流課」が設けられている県、市、大学は少なくない。K市の市役所にも「国際交流課」が設けられていて、現地のことばに堪能な職員「国際交流員」が常駐して対応している。市に滞在している外国人滞在者には、各分野の研修者や留学生や企業人などがいて、さまざまな国際交流圏をつくって暮らしている。多くはないが結婚して定住している人もいる。

海外の姉妹・友好都市から友好・参観にやってきた人びとは、まず県都で交流の時をすごし、

地方を代表する文化に接する。それから市町村にはいる。

海外からの客人たちは、それぞれの「友好市町村」を訪れて、目的である文化やスポーツや物産に関する交流の時を過ごす。各地にある温泉施設に案内されて、日本式のもてなしを受けることになる。これが楽しい。市町村が設けるのは、四季折り折りの美しい風物や料理や温泉を活かした「地域の国際交流施設」である。海外からの訪問者は、

「一生に一度は行ってみたい」

と心躍らせてはるばるやってくる。

「人生っていいな。日本ってすばらしい。別の季節にまた来たい」

と、野天風呂につかって暮れなずむ異郷の空の星を眺めながら、母国語でつぶやいてくれる。

そして「和食」のおもてなし。宿のおかみさんをはじめ、地元の高齢者のみなさんがだれをも等しく親しく迎える姿は、海外から訪れた一人ひとりの友人の心に、母国の暮れなずむ星空を見上げるたびに、「アリガトー」とともに一生のあいだ輝きつづけていることだろう。

わが国の高齢者が持つ「モノづくり」の能力や「親和」の心情は、「シニア海外ボランティア」のみなさんや海外進出企業の高齢社員の実績が示すように、途上国の人びとにとっては発想の原動力ともなるものだ。

これはとくに重要な視点であるが、迎える側のみなさんが、四季を「四つの変化」として際立たせることによって、遠来の客人たちは春・夏・秋・冬（新年）の四回は訪れる楽しさを持

つことになる。いふなれば、四季を時節の刻みとして活かす人びとの暮らしの知恵が、ここでは「優れた小国」の知恵として「国土を四倍に見せる法」となるのである。

そして何より喜ばしいことは、海外の市町村との地道で実質的な交流活動が、わが国が「恒久平和をめざしている優れた文化大国」であることを、海外各地からの発信によって明らかにしてくれることである。「文化大国」なら大国意識を競っても誇ってもいい。

「国際高齢者年99」は新世紀へのメッセージ

*「高齢者のための五原則」が共有の意識

新世紀に迎える地球規模での潮流として「高齢化社会」を予測し、国連は一九九二年に一九九九年を「国際高齢者年」(International Year of Older Persons 1999)と定め、一九九五年にそのテーマを「すべての世代のための社会をめざして」(towards a society for all ages)としたのだった。

「国際高齢者年」——前世紀末近くにそんな国際的行事があったことを知っている高齢者がどれほどいるだろうか。

国連がテーマを「すべての世代のための社会をめざして」としたのは、世代を越えた人びとの賛同と参加を期待したためであつたらう。活動の中心となるのは、世紀の初頭に高年期を迎

える高齢者であり、最初に迎えることになる先進諸国であり、なかでも大型で最速で進む「日本」がさきがけとなる立場にある。

一九九〇年代から新世紀にかけて、そういう明確なメッセージが警鐘にも似た強い風圧として、この国で高齢期を迎えている人びとにしっかりと受け止められていたならば、新世紀一〇年の取り組み方もその結果も大いに異なっていただろう。

そうならなかったのは、なぜなのか。この問いへの答えは重い。

各国が新世紀に迎える「高齢化社会」にむかってスムーズに移行できるよう、国連から次々に取り組みが提案され、一九九〇年代を通じた国際的テーマとなっていたのである。

一九九〇年の総会で、毎年の一〇月一日を「国際高齢者デー」(International Day of Older Persons)と定めたあと、運動の国際的な展開への願いを込めて、

自立 (independence)

参加 (participation)

ケア (care)

自己実現 (self-fulfilment)

尊厳 (dignity)

という五つの「高齢者のための国連原則」を採択したのが九一年であり、そして「高齢者に関する宣言」とともに九九年を「国際高齢者年」と決定したのが九二年のことだった。

一九九九年の「国際高齢者年」の各種行事に参加した記憶をもつ人も少なくないはずである。わが国も当時の総務庁を中心にして自治体や民間団体も参加して全国的な活動を展開した。

当時の民間の活動団体が結集した高連協（当時は「高齢者年N G O連絡協議会」のち「高連協」）が結成されたのもこの時である。

だれであろう、毎年一〇月一日の「国際高齢者デー」に、他国に先んじて活動を展開し、実質的な成果を積み上げて国際的に発信するのは、この国の高齢者の役割だったのである。

一九九九年の「国際高齢者年」をきっかけに新世紀へむかって「日本型高齢社会」へのブランドデザインが提案され、高齢化対応の具体的な取り組みが次々におこなわれ、増えつづける高齢者に呼びかけがなされていたなら、高齢者意識もまた広く醸成されていたことだろう。

自治体によっては、すでに九〇年代に、たとえば東大和市、春日市、枚方市、新居浜市、柳川市など先駆的に「高齢者（高齢社会）憲章」を定めたところもあったのだった。

「長生きは命の芸術品」ではじまるのは、「南国市高齢者憲章」である。

だが全国的な活動にまでは進まなかった。これは明らかに将来構想を示せなかった政治リーダーの責任である。団体でも個人でも国連の「高齢者原則」の五つを意識して活動することが「高齢化国際人」なのである。

わが国の場合は、「自立・参加・ケア・自己実現・尊厳」の国連五原則のうち、わずかに「ケア」だけは実体をもって官民協働で推進されてきたといえる。「国際高齢者年」に参加して高連協を支えてきた福祉関係の団体は、その後も一貫して活動を継続してきているからだ。

九〇年代から新世紀を通じてこの二〇年余り、高齢者みんなが「わたしの高齢期」を意識して、みずからの暮らしを充足させる地域生活圏に「モノやサービスや居場所」をこしらえるために活動して、「高齢化」を実現させていたならば、企業や組織もまた「高齢化対応のリストラ」にも努めていたことだろう。

そして新世紀を迎えて、国民運動として着実に推進されていたなら、わが国の高齢者自身がかれほど早くしわ寄せを受けて苦難を強いられることにはならなかったのである。

五 不戦不争の灯かりを伝えて

不戦不争の灯かりを伝えて

*「平和憲法」施行一〇〇年を祝う

「恒久平和」を掲げた「日本国憲法」は、原子爆弾という人類をも破滅させることができる可能性をもつ武器が登場した先の大戦で亡くなった人びとへの「哀悼のモニュメント」（歴史的記

念碑）であり、とくにその「九条」は先人の心火によって燃えつづけている「不戦不争の灯」ともいべきものである。

半世紀を越え、新世紀を迎えて一五年、その経緯を確認し、党派性を排して「衆議」して引き継ぐべき貴重な歴史文化遺産である。したがって二〇四七年、制定一〇〇年までは「そのまま保持すべきもの」である。

国際紛争は絶えることなくつづき、世界の軍事技術は仮想敵国を想定しながら自己増殖をつづける。それは太平洋戦争以後、朝鮮戦争、ベトナム戦争、イラク戦争で、その恐るべき一端をみせつけた。局地戦はなお絶え間なくつづいている。

？ 改憲？ そんな悪夢のような企てを押し止めるのが、大戦後に平和を託されて生まれたベビーブーマーである九七〇万人の「平和団塊の世代」（戦後ツ子）のみなさんである。とくに女性は、「平和の証」である長寿を一〇〇歳まで競って生き抜いて、「平和憲法一〇〇年」の証になることをお互いの自己実現としてほしい。

体現している「日本高齢社会」がそのまま歴史的な「世界平和へのメッセージ」となることに希望がある。

想像力の深度も構想力の精度も足りない現代の若手政治家には、「日本国憲法」を改変する能力も資格もないことを知らねばならない。先の戦争の惨禍への経緯を繰り返さないために、おおいに論議すべきであるが、自分が納得できるレベルの認識で改憲を実行しようとすれば、必

ず過ちをおかすことになる。

憲法は今ある人びとのためのものではあるが、今ある人びとのものではない。

「自主憲法」などと称して根幹に傷をつけるとすれば、先人にも後人に対しても、これほど恥ずべき行為はない。いま確認すべきことは、憲法の条文の文言の改変をおこなうことではなく、条文の裏に燃えつづけている平和への「先人の心火」を感得し、灯を引き継ぐことである。その地点から戦争の惨禍を想起する想像力を培うことである。

若手の政治家が謙虚になすべきことは、平和を希求する憲法の趣意を「国際世論」とするために努めて、三二年ののちに迎える「平和憲法施行一〇〇年記念」祝典を、国際平和のもとでおこなえるように保ちつづけることである。

国際的に先行してたどる「日本高齢社会」形成への歩みを、「世界平和へのメーセージ」として対置すること。天年（天寿）を全うする一人ひとりの高齢者の日また一日の生命の灯を、戦争への兆しがあるかぎり、歴史を貫いて流れる「不戦不爭の叡智」に託して「戦争放棄・恒久平和」の明かりとして灯しつづけること。

「日本国憲法」の「不戦不爭」の明かりが途絶えたとき、わが国はまた半世紀あまりを積んで得た国際的な評価を閉ざし、歴史的な輝きを失うことになる。

耳をすまして過ぎこし百年の声を聞き、目を見開いて来たるべき百年を見透かせば、選ぶべき道はおのずと明瞭なはずである。

おわりに

そして「**寿終正寝**」(天寿)を全うする

そして「**寿終正寝**」(天寿)を全うする

*八面玲瓏の人生の達成をめざして

国民が穏やかに生きて天寿を全うする「寿終正寝」を願わない国などありえない。「天寿を全うする」ことは個人の願いであるとともに、二一世紀が「平和の世紀」であることは国民としての願いであり、そういう国民がつくる「日本高齢社会」は、国際平和の証のひとつとなる。

だから「高齢化」で先行するわが国に高齢化途上各国が期待するものは、「恒久平和」を掲げる憲法の下で、高齢者がどこでも等しくおだやかな人生を享受することができる「日本高齢社会」の実現であり、その形成へいたる仔細なプロセスである。

市民が穏やかに生きて天寿を全うする「寿終正寝」を願わない市町村などありえない。ひとりの市民として、地域の特性を生かす活動に参加しながら、その成果を享受する。三世

代の「助け合い」は、明日を生きる喜びの源泉となる。

隣人が穏やかに生きて天寿を全うする「寿終正寝」を願わない隣人などありえない。

庭越しに親しい声をかけてくれた少年は、青年になり、父親になった。庭木も大きく育ち、ことしもウグイスがやってきて谷渡りを聞かせてくれた。

日本の高齢者はいま、歴史にまれな長い平和の時代を生きて、「日本高齢社会」を構成するひとりとして存在している。住み慣れた地で、みずからが充足して暮らして、天年（天寿）を尽くすことが、そのまま国際的な信頼を引き継ぐ「平和へのメッセージ」となることを確信しているのではないか。

水玉模様のような「高齢期人生」を送る

*「老中八策」が日々の指針

国際的な高齢化の世紀に、国連が指針として掲げる「高齢者五原則」の結語は「尊厳」(dignity)である。この誇るべき歴史に参加し、そこに連なることをめざして、小さな水玉模様のような「高齢期人生」をたいせつにして日また一日を送る。そのために、われわれが掲げる指針「老中八策」を、ここにご紹介しよう。

「老中八策」 尊厳ある「高齢期人生」を送るための指針

- 一 六五歳から九〇歳にむかって「高齢期人生」を模索しつつ体現中
- 二 「引退余生」の他力依存ではなく「現役長生」の自立意識を確立中
- 三 培ってきた能力を活かして高齢期を豊かにする「モノ・サービス」を制作中
- 四 体（＜病気）・志（＜認知症）・行（＜介護）の三つのバランスで包括ケアを実現中
- 五 三世代（青少年～三〇歳＋中年～六〇歳＋高年～九〇歳＋）現役型社会を創出中
- 六 日また一日欠かさずに「地域生活圏」（共生と共助の文化圏）の形成に参加中
- 七 高齢者の「居場所」でそれぞれの自己目標の実現をみんなで談論・協議中
- 八 水玉模様のような小さな会（丈風の会も）に加わって各地各界の同志と連携中

注：「自立・参加・ケア・自己実現・尊厳」（高齢者五原則）は国連が提唱する国際的な指針。

八策を掲げてはいるものの、すべてをとということではなく、ひとつでも意識して実現にむかうなら、国際的貢献である「日本高齢社会」の形成に参加することになる。

家族が穏やかに生きて天寿を全うする「寿終正寝」を願わない家族などありえない。

こうして日また一日を努めて、八面玲瓏の人生の達成をめざしつつづけて、「尊厳」をもって「寿終正寝」（天寿）を全うすること、願えばだれにでも可能なわが人生である。

自らが穏やかに生きて天寿を全うする「寿終正寝」を願わない人間などありえない。